

バードリサーチ ニュース

2006年3月号 Vol.3 No.3

2006. 3.17.

Photo by Takagi Kentaro

参加型調査

**(株)バイトルヒクマの技術支援により
身近な野鳥調査がバージョンアップ!
～地図を使って簡単に入力できます～**

2005年3月にセブン-イレブンみどりの基金の助成を受けてスタートした身近な野鳥調査「ベランダバードウォッチ」と「季節前線ウォッチ」は、これまでに約200人の方にご参加いただきました。6ページにツバメの季節前線の結果を紹介していますが、徐々に成果もあがりはじめています。

今までは、ホームページ上のフォームを使って情報収集していたので、データをお送りいただいた観察者の方が、自分のデータを確認することができず、「自分のデータが見えるようにしてほしい」という要望がたくさんありました。

このたび、(株)バイトルヒクマの技術支援を受けて、Webサービスのデータベースとして使えるようになり、過去のデータを確認・修正できるようになりました。ご支援に深く感謝いたします。新しいデータベースでは、このほかに、ツバメの初認をした際など、観察地点をGoogle Mapsという地図サービスを使って、ホームページ上で簡単に登録できるようになり、とても便利です。



使いかた

身近な野鳥調査に参加するためには、特別な申し込みは必要ありません。会員の方以外でも、バードリサーチの調査に参加している方であれば、どなたでも参加できます。ぜひ、新しくなったデータベースを使って、身近な野鳥調査にご参加ください。

まず、ホームページのトップにあるログインボタンからWebサービスに入ります。パスワードを入力すると、メニューが開きますので、「その他の調査」にある「身近な野鳥調査」をクリックすると、メニュー画面が表示されます。



緯度 34 度 00 分 00 秒 経度 135 度 07 分 04 秒
調査地の位置は地図の中心に登録されます。(※は必須項目)

調査地の名前	
ふりがな(※)	にたく
調査地名(※)	自宅
調査地の住所	
都道府県(※)	大阪府
市町村部(※)	高槻市風の里町

図1. 調査地の登録画面。

● ベランダバードウォッチ

1. 「調査地の登録」をクリックして、さらに「新規登録」をクリックすると表示される画面(図1)で、調査地の場所と環境を登録してください。

2. メニューに戻って「ベランダバードウォッチ」をクリックし、「家での調査を新規登録」または「家のまわりの調査を新規登録」のどちらかをクリックすると、観察記録を登録するための画面が表示されます(図2)。

3. 登録しておいた調査地点を選んでから、登録画面に鳥の記録を書き込み、画面一番下の「登録する」というボタンをクリックすれば完了です。

種名	出現(※)	個体数	行動
ゴイサギ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
カルカモ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ツバ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
キジ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ゴジュウケイ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
キジバト	<input type="checkbox"/>		観察記録
カウゾウ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
カトキキス	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
アオバシク	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
アマガサ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
アカガラ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
コガラ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ヒヨドリ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ツバメ	<input type="checkbox"/>		初上記録/初着
コシヤカガビ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
イワツバメ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
キセキレイ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ハシロキイロ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
セウロキイロ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ビンズイ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ヒヨドリ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
モズ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ルリビタキ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい
ジョウビタキ	<input type="checkbox"/>		確認、見てほしい

図2. ベランダバードウォッチ(家での調査)登録画面

● 季節前線ウォッチ

メニュー画面で、「季節前線ウォッチ」をクリックして、さらに「新規登録」ボタンをクリックすると、登録画面(図3)が表示されます。

ベランダバードウォッチのように調査地を登録する必要はありませんが、自分がよくいる場所(自宅など)を登録しておくことで、毎回地図で場所を探す手間が省けます。

調査日時	調査地	種名	個体数	行動
		ツバメ		初上記録
		アオバシク		初上記録
		ツバ		初上記録
		アマガサ		初上記録
		ヒヨドリ		初上記録
		ツバメ		初上記録
		モズ		初上記録
		ジョウビタキ		初上記録

図3. 季節前線ウォッチ登録画面

レポート

鳥の歩行観察のススメ

東京大学大学院 農学生命科学研究科
生物多様性科学研究室 藤田祐樹

1. 鳥の歩き方いろいろ

鳥の歩行を研究していると言うと、「鳥の歩行？飛翔じゃなくて？」と、よく言われる。確かに、鳥は飛ぶ動物である。しかし、多くの鳥は地上では歩かし、歩き方にもいろいろある。

例えば、両足をそろえてピョンピョンはねるホッピング(図1)と、左右の脚を交互に出すウォーキング・ランニングがある。それぞれの種はこれらのどちらか一方を好んで行なうことが多い。その理由を気にしている人は割と多くいるが、実はほとんどわかっていないのである。一般的には、樹上性の強い種はホッピングを好むとか、小型の種はホッピングを行なうと言われている。実際にその傾向はあるようだが、実証的研究はなく、メカニズムについてもあいまいな点が多い。

さらに細かく見ていくと、例えばウォーキングは、ハトのように首を振る歩き方や、カモメのように首を振らない歩き方、カモの行なうヨチヨチとした歩き方などに分けられる。それぞれの歩き方に、理由があるはずだが、この中でもハトが首を振って歩く理由は、鳥の歩行では最も人気のある謎である。

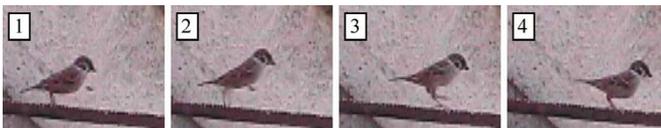


図1: ホッピングをするスズメ。左右の脚をつくタイミングがほんのわずか(1/120秒以下)ずれている。もっと大きくずれる場合もある。

2. ハトが首を振って歩くわけ

私もこれまで、首振りと歩行の関係について研究してきたが、実は、この問題の主要部分は既に明らかにされている。Friedmanというイギリスの研究者が、どんな条件によってハトが首を振るかを調べた結果、首振りがおこるのはハトに対して景色が動くときであることが明らかになった(Friedman 1975)。また、Frost (1978)は、ルームランナーの上でハトを歩かせると、首を振らずに歩くことを示した。私たち人間は、動く物体や流れる景色をはっきり見るために、眼球をキョロキョロと動かして、物や景色を目で追っている。ところが、鳥の間は眼球をほとんど動かさせられないのである。そのかわりに首を動かして、目を頭ごと動かしているのが首振りというわけである。

歩くときにバランスを取っているのだらうと安易に考えていた私は、この論文を読んで愕然とした。首振りは視覚的動作であって、ハトにとって景色が動かなければ首を振らなくても歩けることが証明されていたからだ。

しかし、どちらの研究も、歩行時の首振りが歩行と関係がないことを証明したわけではない。このことを証明するためには、首振りをするかしないかによって、歩行時の体の動かし方やエネルギー効率などが、何も変化しないことを証明しなくてはならないが、これは誰も証明していないし、おそらく証明できない。首振りの原因が視覚的な問題であっても、歩くときに首を振る場合、まったく好き勝手に首を動

かせるわけではない。現実には、ハトなどの首を振る鳥は、決まった振り方で首を振って歩いている。では、首振りと歩行の間には、どのような関係があるのだろうか。

3. 首振りと歩行の関係

図2は、ハトの歩行の連続写真である。1~2では首を伸ばし、2~4では首を縮めている。このとき、重要な点が二つある。まず、首を伸ばすときには、後についた足で地面を蹴っている(図2-1)。そして、片足立ちのときには、首を縮めて頭部を空間的に静止させている(図2-3)。このような歩き方をすると、歩行の効率と安定性が高まると考えられる。

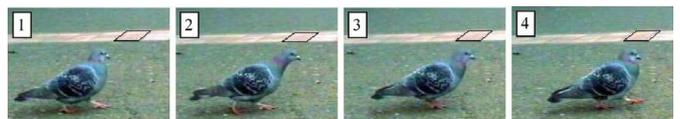


図2: 首を振って歩くドバト。1~2で首を伸ばし、2~3で首を縮めている。写真中の四角形は、路面上の同じタイルを示している。2~3では、このタイルに対して頭が静止している。

足は体の左右についているため、片方の足で地面を蹴ると、左右に体が揺れたり回転したりする。体の揺れや回転が大きいと、歩行が不安定になるし効率も悪くなる。そこで、地面を蹴るときに首を勢いよく伸ばして進行方向の運動に勢いをつけると、揺れや回転を小さくすることができる(図3; Fujita 2003)。似たような動きは、実は人間の歩行でも見られる。もちろん、人間は首を振らないが、上半身をわずかに前後に揺らしながら歩いている。この上半身の揺れは、ハトの首振りと同様なのである。

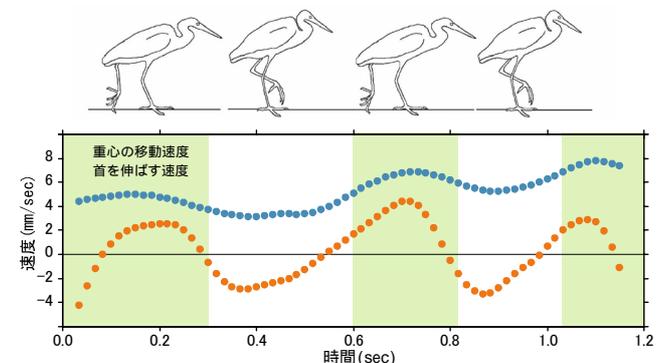


図3: コサギ歩行時の重心移動速度と首の進展速度。鶯色の範囲は両足を接地しており、白色の範囲は片足のみを接地している。上段の図は、それぞれの範囲での鳥の姿勢を模式的に示している。重心移動速度と首の進展速度のピークが一致していることから、地面を蹴って推進力を得ているときに首の進展速度が速いことがわかる。ハトや他の鳥でも同じである。

片足立ちのときに頭を静止させていることも、安定性を高める効果がある。片足で立つことは、両足で立つより不安定である。このときに頭を静止させておく方が、頭を動かすよりもバランスをとりやすい。なぜなら、頭には視覚や平衡感覚器である、目と内耳の三半規管があるからである。頭が安定すると、これらの平衡感覚器への情報入力も正確になり、体のバランスを取りやすくなる(Fujita 2003)。

歩行と首振りの関係は詳しく言えばもっと複雑だが、単純にはこのような理由によって、首振りは歩行の安定性と効率を高めると考えられる。

レポート

4. カモはなぜ、首を振らずに歩くのか？

首振りに関しては、さらに気になる問題がある。それは、「カモはなぜ、首を振らずに歩くのか？」という問題である。少し奇妙な疑問かもしれないが、ハトが歩くときに首を振る理由がわかってくると、逆にカモが首を振らないことが不思議に思えてくる。首振りが周囲をはっきり見るため、しかも歩行の安定性や効率を高めるのだとすれば、首を振らないカモやカモメは、なぜ首を振らなくても平気なのだろうか？

視覚的な問題について言えば、首を振る鳥と振らない鳥では、視力や見ている場所などが違うことが推測される。近くを見る場合には、景色の移動が相対的に早くなるため、目をしっかりと静止させる必要があるが、遠くを見ている場合には、目の静止はそれほど重要でなくなる。

歩行との関係性で言えば、首を振らない鳥は、ハトなどとは違った歩き方をしている。カモが体をゆすってヨチヨチと歩いているのを見ると、ハトとは歩き方が違うというのも納得いくだろう。カモメにしても、パタパタと足を素早く動かして歩いている印象を受ける。カモやカモメの歩き方を、首を振る鳥の歩き方と比べると、首を振る鳥は、一步が長く脚をゆっくり動かすのに対し、首を振らないカモやカモメは、脚を素早く動かして小股で歩いている(図4; Fujita 2004)。また、カモやカモメは、両足をついている時間が相対的に長いこともわかった。

先述の通り首振りによって歩行が安定すれば、片足立ちの時間を十分長くとれるようになり、その脚で地面を蹴る力も安定するため、比較的ゆっくりした動きで大またに歩くことが可能になる。反対に、首を振らないカモやカモメの歩き方は、不安定であるため、転ぶ前に次の一步を素早く地面について安定化をはかっていることを意味する。そのため、足の動きが速く、一步が短い歩き方になるし、両足をついている時間も長くなる。つまり、首振りを行なわない場合は、歩き方を変えれば運動学的には問題がないのである。

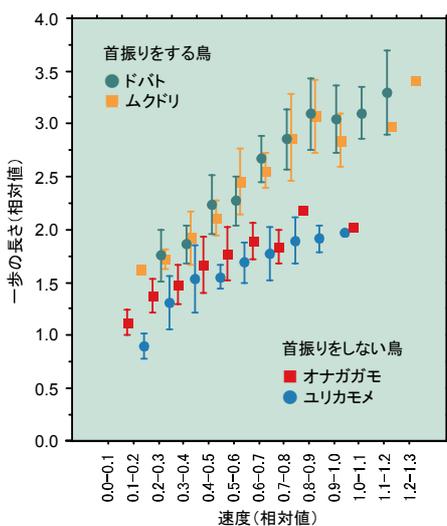


図4: 種による歩き方の違いの一例。黒い記号は首振りしないカモやカモメ、白と灰色は首振りをするハトやムクドリである。速度や一步の長さは、脚の長さによって相対化した値。同じ相対速度で比べると、首振りをする鳥の方が相対的に一步の長さが長い。(Fujita 2004 をもとに作図)

5. 首振り歩行は採食のため？

首を振る種と振らない種がいることの、より究極的な理由として、採食行動が関係している可能性もある。周囲をはっきり見つつ効率よく歩ける首振り歩行は、歩きながら食物を探

すのに都合がよい。ハト、キジ、クイナ、ツル、サギなどといった首を振る鳥は、歩きながら足もと近くのを探している。一方、カモやカモメは、泳いだり飛んだりしながら採食を行なう。チドリも多く、地上で採食するにも関わらず首を振らないが、彼らは、一箇所にじっと立って比較的広い範囲で獲物を探し、見つけるとそこに駆け寄って採食している。

採食行動と首振りに関係があるのではないかと、この考えを裏付ける観察例が、最近いくつか見つかっている。サギ類やカモメ類が、ゆっくり歩きながら食物を探すときには首を振って歩き、そうでないときには、首を振らないで歩く(図5; Fujita in press)。これは、同じ種の中でも、首振りをするかどうか、採食行動と関係していることを意味する。このような研究結果を総合的に考えると、首振りは、歩きながら採食する場合に、周囲をはっきり見ながら効率よく歩くのに役立つと考えられるのである。

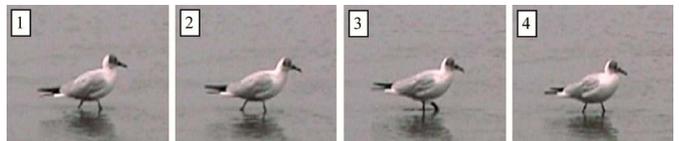


図5: ユリカモメは普段は首を振らずに歩くが、歩きながら獲物を探す場合には、首振り歩きをすることがある。首振りのしかたは、ハトとまったく同じである。

6. 鳥の歩行観察のススメ

ここまで、首振り歩行について紹介してきたが、歩き方はその鳥の生活と深く関わっている。首振り歩行については割と詳しく調べられているが、他の多くの歩き方はあまり調べられていない。冒頭に述べたように、ホッピングとウォーキングのような重大な問題も、まだほとんど手付かずの状況である。そこで、ぜひとも皆さんにも鳥の歩行観察を行なってもらいたい。歩行観察のいいところは、身近な鳥でいろいろ比較するだけでも、何らかの発見があることだ。特別な道具もいらぬ。強いて言うなら、ビデオカメラがあると運動を記録できてよい。何はともあれ、どんな鳥が、どんなときに、どんな歩き方をしているか、少し気にすると、鳥類観察の楽しみが増えることだろう。

引用文献

Friedman, M.B. 1975. Visual control of head movements during avian locomotion. *Nature* 225: 67-69.
 Frost, B.J. 1978. The optokinetic basis of head-bobbing in the pigeon. *J Exp Biol* 74: 187-195.
 Fujita, M. 2003. Head bobbing and the body movement of little egrets (*Egretta garzetta*) during walking. *J Comp Physiol A* 189: 59-63.
 Fujita, M. 2004. Kinematic parameters of the walking of herons, ground-feeders, and waterfowl. *Comp. Biochem Physiol A* 139: 117-124.
 Fujita, M. in press. Head-bobbing and non-bobbing walking of Black-headed Gulls (*Larus ridibundus*). *J Comp Physiol A*.

マガン 英: White-fronted Goose 学: *Anser albifrons*

1. 分類と形態

分類: カモ目 カモ科

全長: 66-86cm 自然翼長: 369-433mm
 尾長: 106-133mm 露出嘴峰長: 43.3-54.8mm
 ふ蹠長: 63.6-77.3mm 体重: 2265-3205g
 ※全長は吉井(監)1988, その他は北海道宮島沼における捕獲データより(2004年4月, 未発表).

羽色:

雌雄同色. 体は灰褐色で背に淡褐色の横斑があり, 下面はやや淡い. 腹には不規則な黒斑がある. 下尾筒と上尾筒は白く, 尾は黒褐色で先端は白い. 嘴は桃橙色で先端は淡く, 基部周辺は白い. 不明瞭な淡色のアイリングを持つ個体もいる. 足は橙色. 幼鳥は嘴基部の白色部と腹の黒斑を欠き, 各々一年目冬と二年目秋頃から発達する. また, 幼鳥の嘴は橙色で先端と外縁部は黒い.



写真1.
マガンの
幼鳥(左)と
成鳥(右)

鳴き声:

キャハハンキャハハンと甲高い声で飛翔中にもよく鳴く. 休息中の群れはブブブ…と低く唸っているように聞こえる. 威嚇時にはシューという声も出す.

2. 分布と生息環境

分布:

繁殖地は, ロシア, アラスカ, カナダ, グリーンランドの北極海沿岸部. 越冬地は, ヨーロッパ, 東・西アジア, 北アメリカの平野部. 亜種の分類と分布には議論が分かれるが, 亜種マガン (*frontalis*) は, ロシア極東北西部からベーリング海峡を超えてフォックス湾沿岸にかけて繁殖するとされ, そのうちユーラシア大陸で繁殖する集団が中国・韓国・日本で越冬するとされている. 国内の分布は局地的で, 越冬期には宮城県北部, 渡り時期には北海道と秋田県の限られた湖沼に集中するが, 一部北陸や山陰にも越冬する. 近年, 北海道で小群が越冬するようになった.

生息環境:

繁殖地の環境は, 北極ツンドラの沿岸部から, やや内陸にかけての湖沼や河川の周辺で, コケ, スゲ, ワタスゲの群落からハイマツの疎林まで様々な環境で営巣するが, 南向きの緩斜面や小高い場所など, 雪解けが早く, 乾燥した場所を好むという. 越冬地の環境は, 湖沼や河川とその周囲に広がる農耕地や草地などで, ねぐらと採食地を併せ持つ開けた環境を好む.

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
越冬	渡り	繁殖期	渡り	越冬							

繁殖システム:

一夫一妻で, ペアは生涯続く. 親子関係は2~3年続くことが多く, 繁殖開始齢は3齢が多い. メスだけが抱卵し, 一日に一回, 短時間巣を離れて採食する. オスは警戒にあたる. 基本的に単独営巣で, 前年の営巣地の近くを利用する.



写真2. マガンの家族群.

[Photo by 森口紗千子]

巣: 巣は地面のくぼみにコケやスゲ等を敷いて作られ, 産卵後には綿羽も混ぜられる

卵: 産卵は, 5月末から6月上旬に行われる. 産卵数は2~7, 平均4, 5卵だが, 雪解けが遅い年には産卵数は少ない. 卵サイズは長径約80mm, 短径約53mm. 卵色はくすんだ白.

抱卵・育雛期間:

抱卵期間は約25日. 最終卵の孵化後, 家族群は採食に適した川辺などに移動し, いくつかの家族群と合流して雛の成長を待つ.

渡り: 親鳥は7月末から換羽を始め, 8月中旬には幼鳥と時期を同じくして飛べるようになる. 家族群は, 9月初めには繁殖地を離れる. 東アジア個体群の渡り経路については, 断片的な情報がいくつかある. 衛星追跡の結果では, 国内主要越冬地である宮城県北部から秋田県八郎潟, 小友沼, 北海道ウトナイ湖, 宮島沼を中継して, 一気にカムチャツカ半島に到達し, 最終的にはベーリング海に面したハティルカ付近の湿原にたどりついた (Takekawa *et al.* 2000). 繁殖地は特定できなかったものの, サハリンを北上した個体もいた. 一方, 北陸や山陰の越冬集団は, 日本海を横切り大陸に向かうと考えられている.

4. 食性

植食性. 繁殖地では, イネ科, スゲ科, トクサ科の葉や根茎部とベリー類などで, 越冬地では, 農耕地で落ちモミ, イネ科雑草, 小麦, 牧草などを採食する. 雛は昆虫など動物質のものも摂取する

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

●食べ物には意外にうるさい?

著者らは国内の代表的な中継地である宮島沼周辺農耕地で, マガンの調査を行っている. この地域でマガンは通常, 収穫後の水田で落ち籾を採食しているが, 春の滞在

期後期に生育途上の小麦の葉を採食するため、問題となっている。筆者らは、落ち籾と小麦の葉での採食効率やエネルギー価の違いに注目することで、マガンが春の後期に小麦の葉を採食し始めるのは、本来は小麦よりもエネルギー摂取効率が高い落ち籾が、採食などによって減少した結果、小麦の葉の方がより多くのエネルギーを摂取できるようになるためであることを示した(Amano *et al.* 2004)。

このような質の違いにシビアな食物選択の背景には、渡りとエネルギー摂取の密接な関係がある。ガン類を代表とする植食性の渡り鳥では、長距離の渡りを効率よく行うために、小さく単純な消化構造しかもつことができない。一方で、休息なしで時に数千キロに及ぶ渡りを行い、中継地で蓄積したエネルギーを繁殖にも利用するガン類は、特に春の中継地で多大なエネルギー摂取を必要とする。そのため、質の高い食物を厳選して大量に摂取する採食行動が進化してきたものと考えられるのである。

ガン類の蓄積脂肪量は主に下腹部の脂肪量に反映されるため、個体によるエネルギー摂取の程度は、下腹部のふくらみによって推定できる(写真3)。もし、マガンを見る機会があれば、個体の下腹部に注目して、その個体の最近の「台所事情」に想いを馳せてみてはいかがだろうか。



写真3. 下腹部の膨らみは個体によって異なる。

●個体数と渡来地数の変化

マガンは、かつて日本の各地に広く渡来し、個体数も多かったが、その後個体数が減少し、渡来地数も減った。

狩猟禁止などの保護対策がとられた1970年代以降、個体数は増加し、近年では東アジア地域の個体群は10~15万羽と推定され(Wetlands International 2002)、国内でも10万羽を越える数が確認されるようになっている(図)。

その一方で、渡来地数は減少したままになっており、現在、北日本を中心とする少数の湖沼に多くの個体が集中し、伝染病の発生等による絶滅リスクを高めるだけでなく、小麦や牧草への食害などの問題も引き起こしている。

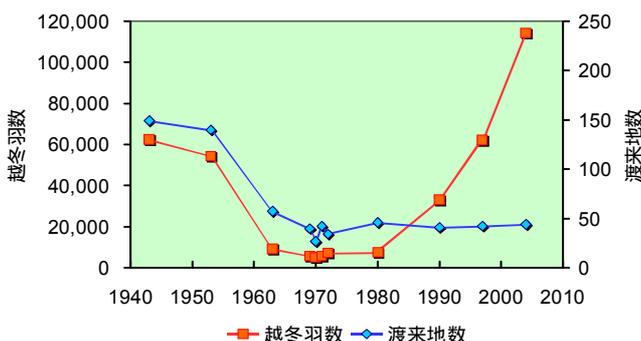


図. 日本におけるマガンとヒシクイの越冬羽数と渡来地数の変化。宮林ほか(1994)、Miyabayashi & Mundkur (1999)、環境省(2005)より作図。

食害問題が顕著な宮島沼では、小麦食害は落ち籾の枯渇によって起こることが明らかになっているため(Amano *et al.* 2004)、人為的に落ち籾を散布する代替採食地の設置や、秋耕や糞集めなど落ち籾量を減らす農業活動の規制も、食害対策として考えられている。

一極集中化に伴う種々の問題を解消する対策としては、生息地の分散が挙げられる。全国的な広がりを見せる冬期湛水水田の整備も有効であるが、潜在的に利用可能な湖沼の保全や整備も必要であろう。

また、増加し続けるマガンの保全部管理を考える上で、個体群構造や個体群動態の現状把握も今後の重要な課題である。具体的には、標識個体を利用した死亡率や繁殖成功率など個体群動態パラメータの収集、越冬個体群の集団構造解析などが挙げられる。

6. 引用・参考文献

Amano, T., Ushiyama, K., Fujita, G. & Higuchi, H. 2004. Alleviating grazing damage by white-fronted geese: an optimal foraging approach. *Journal of Applied Ecology* 41: 675-688.

環境省自然環境局野生生物課. 2005. 第36回ガンカモ科鳥類の生息調査. 環境省, 東京.

Miyabayashi, Y. & Mundkur, T. 1999. Atlas of Key Sites for Anatidae in the East Asian Flyway. Wetlands International - Japan, Tokyo, and Wetlands International - Asia Pacific, Kuala Lumpur, 148pp.

宮林 泰彦・須川 恒・呉地 正行. 1994. ガン類渡来地目録の作成とそれによって明らかになった渡来地保護の課題. ガン類渡来地目録第1版, 雁を保護する会, 若柳, p.5-27.

Takekawa, J.Y., Kurechi, M., Orthmeyer, D.L., Sabano, Y., Uemura, S., Perry, W.M. & Yee, J.L. 2000. A pacific spring migration route and breeding range expansion for greater white-fronted geese wintering in Japan. *Global Environmental Research* 4:155-168.

Wetlands International. 2002. Waterbird population estimates - 3rd edition. Wetlands Internationals Global Series No. 12, Wageningen, The Netherlands.

吉井正(監修). 1988. コンサイス鳥名辞典. 三省堂. 東京.

執筆者

牛山克己(右) 美唄市
天野達也(左) 東京大学大学院博士課程



マガンの農業被害問題における生態学的管理を掲げ、ひとりぼっちで始めた Goose Project も今や三人に。ガン類の保全部管理や生態全般に関する研究にも着手する。問題は、全員朝が弱いことと、お酒の誘惑に弱いこと。

参加型調査

季節前線ウォッチ
～ツバメの初認をお知らせ下さい～

植田睦之

3月になりました。空を黄色く染める花粉、迫り来る報告書の締め切りなど、気の滅入ることもあります。ツバメのやってくる楽しい季節でもあります。東京にいと信じられないのですが、すでに宮崎では巣作りが始まっていると2月12日に報告をいただいています。また、熊本にも続々とツバメが飛来しているそうです。

季節前線ウォッチのツバメの調査では、巣のある場所にツバメがやってきた日の

- 3月31日
- 4月 1日 - 4月 5日
- 4月 6日 - 4月10日
- 4月11日 - 4月20日
- 4月21日 -

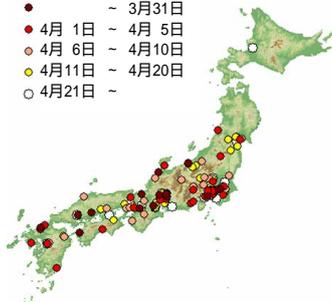


図. 昨年のツバメの季節前線。調査開始が遅かったため、今年のように早い記録はありませんが、平地から標高の高い場所へ、そして東北地方へと飛来していく様子がわかりました。

記録を集めています。飛来初期にツバメが川などで採食しているのが見られますが、それは対象としていません。越冬ツバメのいるところでは、初認との区別がつかなくなってしまうからです。通勤の時などに近所や駅にあるツバメの巣に、ツバメが帰ってきているかどうかを気にしてみてください。そして、その情報を、1ページで紹介したWebサービスか、以下のアドレスからお送りください。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_chosakekka.html

昨年の調査では、太平洋側、日本海側問わず、東日本以西の海岸の平地に定着して、徐々に標高の高い方へ、そして東北地方へと季節前線が動いていく様子が見られました。今年はどうでしょうか？結果はホームページやニュースレターでお知らせいたします。

また、初認のあとのツバメの繁殖状況などの観察記録は「ツバメかんさつ全国ネットワーク」のページで記録することができます。このネットワークはバードリサーチと日本野鳥の会が中心となって運営していますので、こちらのほうも、ぜひ覗いてみてください。3月末頃に今年のホームページがオープンする予定となっています。

<http://www.tsubame-map.jp/>

図書紹介

雁よ渡れ

呉地正行著／どうぶつ社 定価1800円（税別）

今月の生態図鑑はマガンでしたが、ちょうど、雁についての本が発行されました。この本を書いた、呉地正行さんは日本雁を保護する会の会長です。この会は日本で最初の種を対象としたグループの1つで、今までに、ガン類の渡来地目録の作成、日ロ共同での渡りの調査、シジュウカラガンやハクガンの復活計画など、それまで誰も行なってこなかった夢のあるテーマで活動をすすめてきています。最近、冬に田んぼに水をはってガン類のねぐらや水鳥の生息地を創り出す「ふゆみずたんぼ」の活動を行なっており、一部の地域に集中してしまっているガン類を全国に分散させよう、という活動も始めています。この本では、これらの活動を紹介します。過去の記事を編集した本なので、継ぎ接ぎ感があったり最新の状況が抜けてしまったりと残念な部分もありますが、活動それぞれの内容が興味深く、バードリサーチもこういう夢のあるプロジェクトをやりながらも根を張ったいい活動をしたいな、と刺激になりました。

今回読んで、一番興味を引いたのは、宮城のガン類の飛来時期が遅くなり、渡る時期が早まっているということです。ガン類の場合は積雪が少なくなり、それまで越冬していなかった地域で越冬あるいは長期滞在するようになってきていて、そのため宮城に飛来時期が遅くなっているそうです。最近、ツグミなどの小型の冬鳥もなんとなく飛来が遅くなっているように感じますが、どうでしょう？これらの鳥たちについても同じようなことが言えるのでしょうか？あるいは違う理由なのでしょうか？そのあたりについて季節前線ウォッチなどのこれからのバードリサーチの活動の中から見えてきたらいいな、と思いました。【植田睦之】



バードリサーチニュース 2006年3月号 Vol.3 No.3

2006年 3月 17日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘II-202

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎